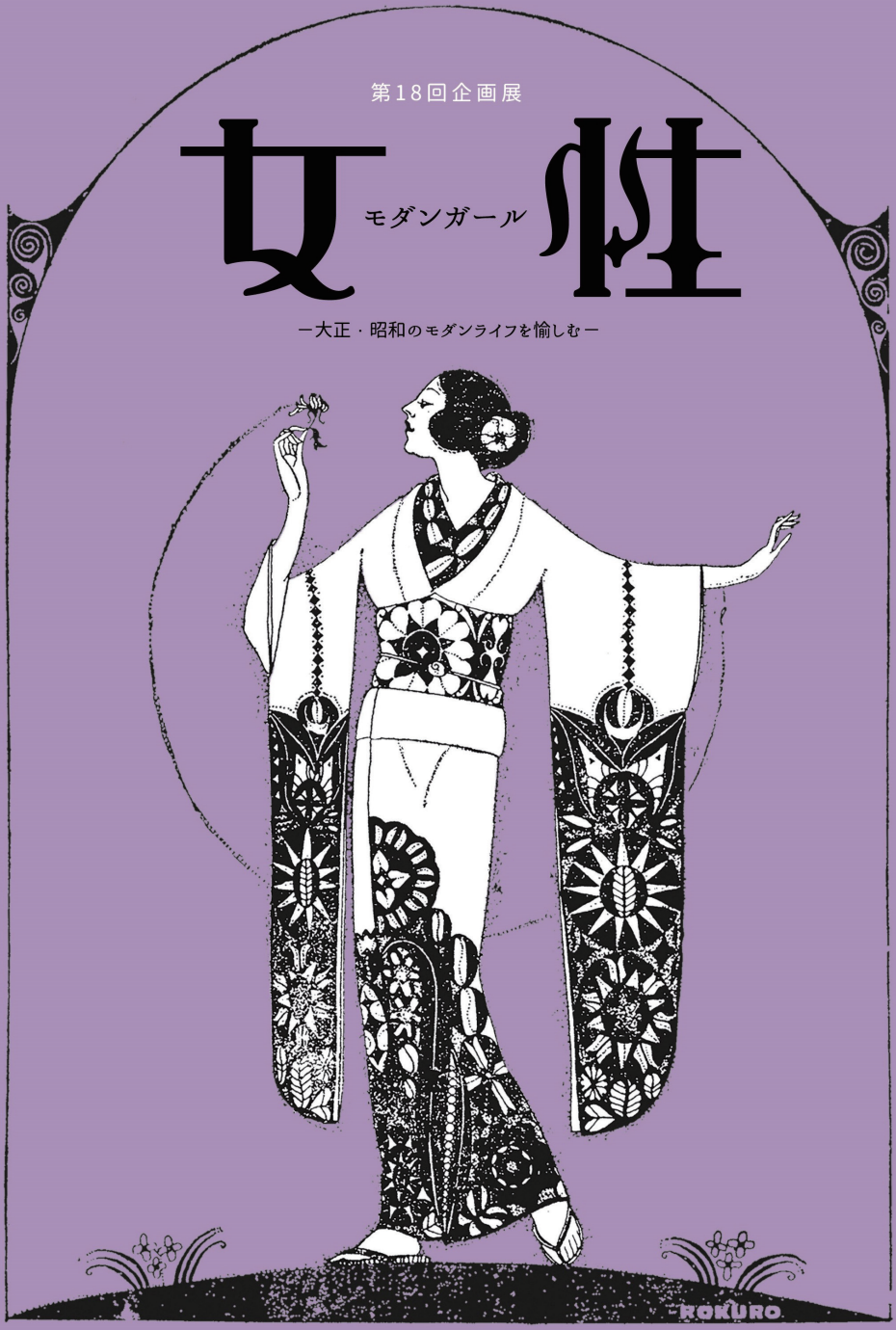
第18回企画展

女性

モダンガール

ー大正・昭和のモダンライフを愉しむー



2022年4月1日（金）～2022年5月31日（火）

9:30～17:00（5/6、日祝日を除く）

大阪市西区西本町2-6-11 1階 文化資料室 Osaka Metro 中央線「阿波座駅」1番出口すぐ

事前予約制
入場無料

株式会社クラブコスメチックス

ごあいさつ

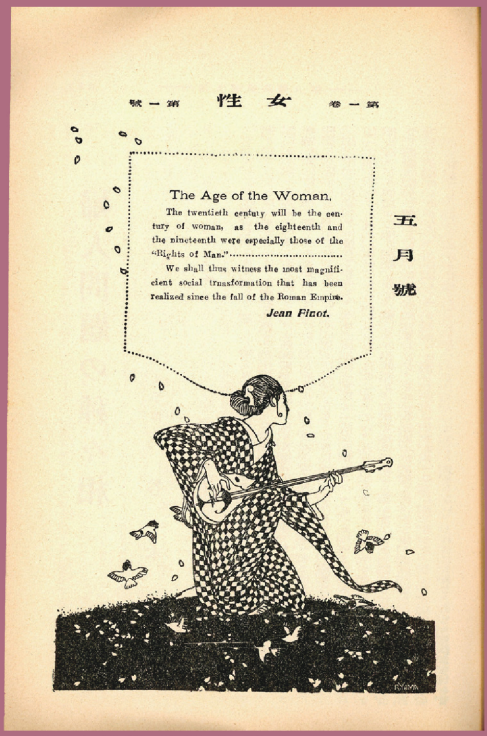
大正終わりから昭和初めに登場した「モダンガール」（モガ）は当世風の女性を指し、当時流行語となり一世を風靡しました。多くは開放的な人柄で、享楽的な思考を持つ若い女性を指しています。一部の女性はそれまで結っていた長い髪を短く切り、着物をワンピースに着替え、下駄をハイヒールに履き替え、和装から洋装へと姿を変えていきました。また職に就き趣味や娯楽を楽しむようになり、家の外に出掛けるようになっていきます。

同時期にクラブ化粧品では「近代美粧」を掲げ、「整容は心です。よき心の表れです。よき心はやがて美しき容姿です。即ち眞の美は清き心と美しき容姿を相俟つものです。」と説明しています。モダンガールは単に断髪や洋装など外見を表すだけでなく、知識や教養、社交性やセンスなど内面も求められていました。

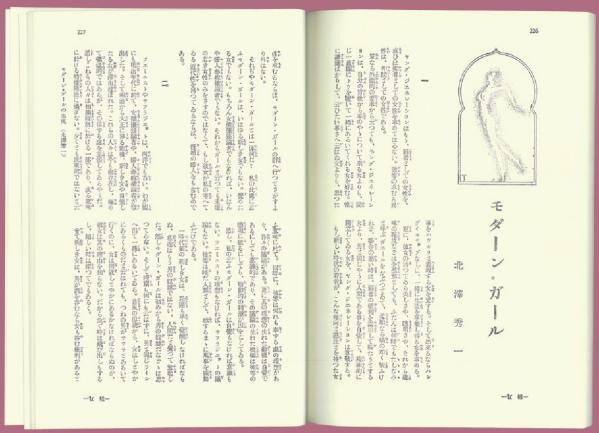
本展では真にモダンガールと呼ばれた外見と内面を併せもつ女性を取り上げ、その範囲はモガに憧れを抱いていた多くの女性にまで及んでいます。当時の女性の化粧を中心としたファッションやその周辺の文化から、今もなお魅力あふれるモダンガールの世界をお楽しみください。

序章 モダンガールとは

大正11年5月にプラトン社より雑誌『女性』が創刊します。当初プラトン社は中山太陽堂のPR誌を発行する為に設立しましたが、劇作家小山内薫（おさないかおる）が編集顧問になり、本格的な文芸誌へと舵をきりました。創刊号の扉絵には図案家山六郎（やまろくろう）のカットとともに、フランスの社会学者ジーン・フィノット「女性の時代」を掲載し、その幕を開けています。大正13年8月号に掲載した北澤秀一（きたざわひでいち）「モダーン・ガール」では、当時「新しき女性」とされた「仲間としての女性」が書かれました。また『婦人世界』昭和4年7月号掲載の「モダンガールの資格十ヶ條」には、当時新たに生活の中に登場してきた都市文化をみることができます。モダンガールとは単に断髪や洋装などの外見や開放的な行動をさすだけではなく、近代的な思考の上に自らの欲求をもって行動する自立した女性といえるでしょう。



雑誌『女性』第1巻 第1号（大正11年5月）プラトン社
カット：山六郎



雑誌『女性』第6巻 第2号（大正13年8月）プラトン社
カット：橘文二

「モダンガールの資格十ヶ條」
雑誌『婦人世界』第24巻7号（昭和4年7月）実業之日本社

第1章 モダンガールのよそおい

モダンガールの姿は主に近代的な都市文化の中にみることができます。銀ブラや心ブラで立ち寄る百貨店でショッピングを楽しんだり、楽器を演奏したりダンスを踊りました。時には劇場や旅行に出掛けたり、レジャーやスポーツで身体を動かしたりもしました。開放的で行動的な女性たちはファッションにおいても、和洋折衷・新旧混合しながら近代的な髪型や服装へと姿を変え、近代的な化粧品でその身を粧います。

昭和初期のクラブ化粧品のカタログでは「近代美粧」を掲げました。商品の使用法を掲載するだけでなく、衣装の色や顔の形、昼や夜で変化する照明に合わせた化粧法など、多様なスタイルに合わせた化粧法を提唱しています。

また中山太陽堂は、大正12年に大阪の堂島ビルヂング内に美粧院を開設しました。都市の女性たちに美を施し、多くのモダンガールを生み出します。

『みつこしタイムス』
第11巻 第5号
（大正2年4月）三越呉服店
表紙：杉浦非水

百貨店

明治37年12月14日三越呉服店が都内各紙にデパートメントストア宣言を発表しました。旧来の呉服店の営業法を、欧米のデパートメント風に一変しました。また、デパートメントストアを百貨店と訳して最初に用いたのは、雑誌『商業界』の主幹で、後に中山太陽堂の広告部に招いた桑谷定逸だと言われています。

モガたちはモダンを取り揃えた百貨店で買い物を楽しみ、自身に磨きをかけました。

ダンス

モガが好んだ娯楽として、昭和初期にジャズ音楽とダンスが流行します。またダンスホールも流行し、モダンボーイなどと踊りを楽しみました。

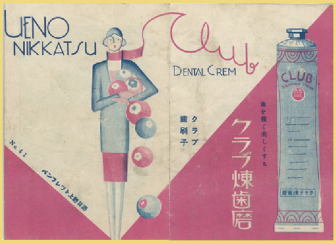
雑誌『女性』第8巻第6号
（大正14年12月）プラトン社 表紙：山六郎

雑誌『婦人世界』第3巻第7号
（明治41年6月）実業之日本社

雑誌『苦楽』
第3巻 第1号
（大正14年1月）
プラトン社
表紙：山名文夫

音楽

モガたちはクラシック、ジャズなどジャンルを問わず、西洋音楽に憧れていました。音楽はたしなみとして、聴くものから演奏するものへと変化していきます。特にヴァイオリンやピアノ、マンドリンが人気を集めました。



左：劇場パンフレット広告『ミヤコ週報』106（昭和３年）みやこ座

上：劇場パンフレット『UENO NIKKATSU』NO.41（昭和５年）上野日活

観光

明治末から昭和初期、鉄道や観光業が発達するための環境が整備されつつありました。同時にサラリーマンなど新中間層の余暇の活用により、観光ブームがやってきます。そして多くの人々が国内旅行を楽しむようになります。

観光パンフレット『厳島案内』（昭和２年）

劇場

大正から昭和にかけて大衆娯楽の中心的存在であった劇場は、連日多くの人々で賑わいをみせました。芝居や寄席、歌舞伎など多くが上演される中、活動写真（キネマ）や喜劇の人気は群を抜いていました。

雑誌広告『演芸画報』
第８年 第７号
（大正 10 年７月）演芸倶楽部

雑誌『苦楽』
第５巻 第 11 号
（大正 15 年 12 月）プラトン社

レジャー スポーツ

明治以降、女性は学校で体操を習い、肉体的に発達をみせ始めます。海水浴は大正から昭和にかけ、娯楽の1つとして定着をみせつつありました。またゴルフは当初一般的ではなく、富裕層が楽しむスポーツでした。同じ頃、冬のスポーツであるスキーやスケートも大衆に普及していきます。

タブロイド紙広告『アサヒグラフ』
第11巻 第10号（昭和３年９月５日）
東京朝日新聞発行所

ファッション ヘアスタイル

モガといえば、断髪に釣鐘型の帽子を被り、膝下丈のワンピースにヒールを履く姿が印象的です。実際は洋装や断髪は少数派で、その珍しい姿は街のファッションリーダー的存在でした。

まだ和装も多く、着物に合わせて髪を束ねることができるよう、多くは長い髪をしていました。当時髪を切ることは決死の覚悟が必要で、多くの女性たちは「耳隠し」や「束髪」と呼ばれる西洋風ヘアスタイルをよそおいました。

左：雑誌『女性』第 11 巻 第５号（大正２年４月）プラトン社　表紙・山六郎
中：雑誌『クラク』第６巻 第 12 号（昭和２年 12 月）プラトン社 表紙・山名文夫
右：ポスター「クラブ美粧講演会」（大正２年頃）

化 粧

モダンな流れは化粧にも見られる。西洋風の化粧品や化粧法を取り入れ、それまでの和化粧から西洋風和化粧へと進化しました。

中でも特に流行したのは、白粉＝白色という概念を覆す色付きの白粉でした。西欧で流行していた肌を自然に美しく見せる化粧法です。当時、既に数多く種類が存在していた白粉で、色とりどりの展開をみせました。クラブ化粧品では、昭和９年までに近代麗色として 12 色の刷き白粉を発売しています。単に雰囲気を演出するだけでなく、つける時間帯や服装によって使い分けることを推奨しました。

「クラブ粉白粉」（昭和初期）、「クラブはき白粉」（昭和初期）
「クラブ固煉白粉」（大正初期～昭和初期）、「クラブタルカン」（大正末～昭和初期）
「クラブ水白粉」（明治末～大正中期）、「クラブ白粉」（大正末～昭和初期）

商品カタログ『近代美粧』（昭和初期）中山太陽堂

「クラブ水白粉」肌色
（昭和初期）

「クラブ水白粉」肌色
（大正中期 ～昭和初期）

「クラブ水白粉」白色
（明治末 ～大正中期）

近代美粧

クラブ化粧品は近代美粧を「眞の美は清き心と美しき容姿と相俟つものです。」と説明し、化粧は「婦人の身嗜みとして（中略）最も必要な美的修養」と紹介しています。また、化粧美を得るためには「良き商品の選択」と「合理的使用」が必要としています。

「クラブ白粉錠」（昭和初期）

「クラブ白粉」肌色　白色
（大正中期～昭和初期）

PRカード「クラブはき白粉」
（大正中期～昭和初期）

「クラブはき白粉」（昭和初期）
「クラブ乳液」（昭和初期）
「クラブ美身クリーム」（昭和初期）

「クラブ口紅クリーム」
（昭和初期）

「クラブほゝ紅」
（昭和初期）

美粧院

大正 12 年に中山太陽堂の創業 20 周年記念事業の 1 つとして、堂島ビルヂング内にクラブ美粧院を開設します。美容院のように、着物の着付から結髪（ヘアセット）を行っていました。昭和 3 年 2 月には、当時日本ではまだ珍しかった美装具を店頭に採用し、美容部員のような役割を果たします。

また美粧講演実演会などの出張イベントも数多く開催しました。

左下: カタログ
『中山整容美粧研究所内 美粧院』
（昭和初期）

中下: 写真「美粧院」
（大正末～昭和初期）

右下: リーフレット
「クラブ美粧講演実演会」
（昭和初期）

右 : PR 紙『太陽堂月報』
昭和 4 年 6 月号 14 面
（昭和 4 年 6 月）中山太陽堂

第 2 章 モダンガールのたしなみ

中山太陽堂は創業 20 周年記念事業として、大正 13 年 1 月に中山文化研究所を開設します。「眞の精神生活と合理的な物質世界との融合によつて理想に近い優良な生活を實現」することを理想に掲げました。所内には四大機関を設け、女性文化研究所には女性の社交場を設けます。また整容美粧研究所では美を、口腔衛生研究所では健康を、児童教養研究所では育児を援けました。

大正期は急速な経済発展によって女性の社会的需要が高まり、働く女性は職業婦人と呼ばれるようになります。ウェイトレスやデパートガール、バスガールなど新たに様々な職業が誕生し女性が活躍しました。また同時に婦人誌の創刊が相次ぎ隆盛を極め、その時期により誌名における女性の表現に変化が生じています。「婦人」や「婦女」と呼ばれていた女性は、職業婦人と対峙する「主婦」へと移り変わっていきました。

左: 写真「中山文化研究所 婦人談話室」（大正末～昭和初期）
右: 新聞「大阪毎日新聞」（大正 12 年 7 月 13 日 6 面）

女性文化研究所

中山文化研究所内に開設した女性文化研究所では、所内に婦人談話室を設け、家政や文芸、科学などに関する講座を開講します。また、学識者による講演会を開催するなど、文化発信と研究の拠点となりました。

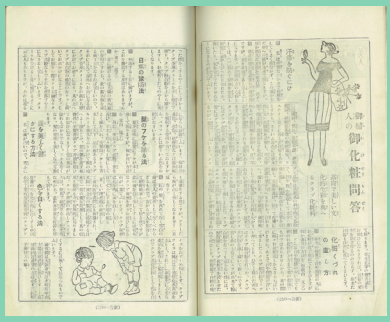
女性誌

明治 33 年に義務教育の授業料が廃止になり、就学率や識字率が上昇しました。明治 17 年には日本初の婦人雑誌『女学新誌』が創刊しています。黎明期における婦人雑誌の内容は「良妻賢母」をおしひろめるものでした。

大正後期から昭和にかけて、大衆向け婦人雑誌が多く創刊し、読者層はひろまりをみせます。婦人雑誌はモガが知識や情報を得る 1 つの手段となっていたことでしょう。

雑誌広告『婦人世界』
第 4 巻 第 8 号（明治 42 年 7 月）
実業之日本社　織田一磨 画

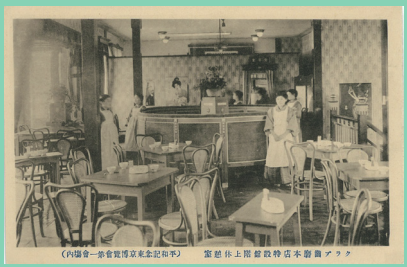
雑誌広告『婦人画報』第 188 号
（大正 10 年 9 月）東京社



左: 雑誌広告『婦女界』第 28 巻 第 3 号（大正 12 年 9 月）東京市丸の内婦女界社
中: 雑　誌 『女性』第 11 巻 第 2 号（昭和 2 年 2 月号）プラトン社
右: 雑　誌 『家事と衛生』第 3 巻 第 7 号（昭和 2 年 7 月号）家事衛生研究会
表紙・高橋春佳

職業婦人

大正から昭和初期にかけて東京を中心に都市化が進みました。社会全体で産業化が進むなかで、多くの働き手が求められるようになっていきます。当時新しく誕生した分野の職業や、それまで男性の仕事とされていた職業に女性が就くようになり、職業婦人が誕生しました。バスガールやエレベーターガール、タイピストや電話交換手といった当時人気があった花形の職業がある一方、従来からある工場でも、大正 5 年に施行された工場法を契機に職場環境の改善が行われ、女性の就労促進がなされていきます。



左 ： 絵葉書「平和記念東京博覧会 クラブ化粧品特設館内休憩室の給女」（大正 11 年）

左下: 写真「クラブ白粉の製造現場」（昭和初期）

中下: PR 紙『太陽堂月報』昭和 5 年 1 月号 14 面（昭和 5 年 1 月）中山太陽堂

右 ： チラシ「日本橋白木屋のクラブ化粧品デー」（昭和初期）